Osaka University Knowledge Archive

Title	定住外国人とその社会的文脈の関係から導きだす「見えない生活者」の再構築 : リフレクシブ・エスノグラフィーという手法を用いて
Author(s)	八木, 真奈美
Citation	大阪大学, 2008, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/49387
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【11】

氏　　名	八　木　真奈美（やぎ　まなみ）
博士の専攻分野の名称	博　士（文　学）
学位記番号	第　２２４３４　号
学位授与年月日	平成 20 年 9 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当 文学研究科文化表現論専攻
学位論文名	**定住外国人とその社会的文脈の関係から導きだす「見えない生活者」の再構築－リフレクシブ・エスノグラフィーという手法を用いて－**
論文審査委員	（主査） 教　授　青木　直子 （副査） 教　授　真田　信治　　准教授　渋谷　勝己

論文内容の要旨

本論文は、中国帰国者３世の「さくらさん」（仮名）を研究協力者とし、日本語教育機関や地域の日本語教室などに通っていない、言葉を換えれば、日本語教育関係者の目に触れない在日外国人が、日々どのような言語生活を営んでいるのかをエスノグラフィックな手法を使って明らかにすることで、日本語学習支援関係者に対して提言を行うことを目的としている。論文は３部構成となっている。分量は 400 字詰め原稿用紙約 670 枚である。

第１部第 1 章で、申請者はまず教師としての自分史を語り、この研究に至るまでの経緯を明らかにしている。第２章では、増加し続ける在日外国人に関する国や自治体の取り組み、また文化庁の日本語学習支援に関する取り組みを概観し、その問題点を指摘した上で、本研究の意義について述べている。第３章は「協力者の理解を深めるための先行研究」と題され、中国帰国者とは何かから説き起こし、これまでの中国帰国者を対象とした日本語教育研究と、それ以外の分野における中国帰国者研究のレビューを行っている。第４章は、近年の第二言語習得研究で注目されている社会的文脈という概念に焦点をあて、第二言語習得研究一般および日本語習得研究の研究史を概観した上で、本論文の立場を明らかにしている。

第２部は方法論と調査の概要で、第 1 章ではこの論文で用いられているエスノグラフィーという方法論の起源、定義、変遷が述べられている。第２章では、本論文の研究協力者との出会いから、データ収集と分析がどのように行われたかまでを詳細に記述している。

第３部はデータの分析結果を提示する産物としてのエスノグラフィーである。第１章は、さくらさんが来日直後から通い始めた地域の日本語教室での学習の様子を、ボランティアとしてさくらさんとペアになった筆者の視点から記述し、さくらさんへのインタビューで研究者の解釈を補完している。学習動機が高く進歩の早いさくらさんは、この教室の方針に飽き足らず、仕事が忙しくなったこともあり、教室をやめた。筆者は、これを授業者であるボランティアから「見える学習者」「見えない学習者」そして「見えない生活者」への変化であると位置づけている。さらに、この章の最後には、「見えない生活者」となったさくらさんが、職場で係長の代理として朝礼で同僚に指示を伝えるまでになっていく様子を描き、日本語教室では決して成功例とは見なされないであろうさくらさんが、実生活の言語使用では成功をおさめているという事実を指摘する。第２章は、さくらさんの中国語を媒介とした社会的ネットワークの記述である。さくらさんを中心として、家族、親族、友人、日本で出会う中国人、中国語を話す日本人という同心円上に拡がるネットワークを記述する中で、申請者は中国語が、家族のきずなを媒介する言語であり、日本社会へのアクセスを助けてくれる中国人と知り合うための言語資本であり、日本社会という広大な日本語の海で生活する際の力となっていると指摘する。第３章は、さくらさんのアイデンティティを扱っている。インタビューにおけるさくらさんの語りから、さくらさんは存在の根として中国よりの内面的アイデンティティを持っていると同時に、私は私である（ナニジンであるかは重要でない）という外面的アイデンティティを持っていると申請者は分析する。そして、日本では中国人として、中国では日本人として扱われるさくらさんが、他者に規定されるアイデンティティを受け入れ、文脈によって切り換えを行っていることを指摘している。第４章は結論と提言であり、本論文で明らかになったことを整理した上で、地域の日本語教室における学習支援方法の転換と、アカデミックな世界の外にいる人にも働きかけられる研究のあり方を提言し、今後の課題を提示している。

論文審査の結果の要旨

日本に定住する外国人の数は今後も増加することが予想される。定住外国人の日常生活の中での姿は、通常、教師や研究者の目に触れにくい。本論文は、３年にわたるフィールドワークによって、「さくらさん」の生きる姿を社会的文脈ごと描きだしたという点で、学問的、社会的意義の大きいものである。特に、日本語の学習、日本語の使用に限定せず、中国語を含めたさくらさんの言語使用を包括的に扱ったこと、言語とアイデンティティの問題に踏み込んだことは特筆に値するだろう。しかし、本論文に問題点がないわけではない。タイトルにあるリフレクシブ・エスノグラフィーとは、自己再帰的エスノグラフィーと翻訳できる。これは研究者の自己が研究の過程でどのような役割を果たしているのかを内省的に振り返り、それによって質的研究の妥当性を確保しようという姿勢である。だが、この論文では研究者である申請者の自己がどのようなもので、研究の過程にどのような影響を与えたのかが、かならずしも明確に語られてはいない。また在日外国人への日本語学習支援に関する問題意識から出発したにも関わらず、さくらさんの日本語の習得に関しては第３部第１章以外ほとんど触れられておらず、結果として、学習支援方法に関する提言

が力を欠いたものになってしまっている。しかし、これらの欠点は、本論文の博士論文としての価値を下げるものではない。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。